

コラム —Column—

昔は、どこの家にもものこぎりや金づちがありました。生活の中で自然と木工というものを体験していたものです。しかし、現代の生活の中では、なかなか木工に親しむ機会がないため、木材利用センターで木工の楽しさを知ってもらえればと思っています。

木工が「とつつきにくい」と言われる背景には、木をまっすぐ切るという最初の工程からいきなり難しいということがあげられます。ある程度の技術がないと、取り掛かることすらできません。しかし、そういった障壁を解消するために、組み立てやすいキットもあります。まずは、木工の楽しさをたくさんの人に知ってもらいたいと考えています。

そうして木工を通じ、知ってもらいたいことは、「ものづくりは大変」、そして、「失敗はつきもの」だということです。うまくいかず投げ出したくなることも多いですが、そういった経験を通じて、自分と向き合い、思うようなものができたとき、本物の感動と出会うことができるんです。

木は、ただの素材ではなく、山で育った命。それに、制作者の魂をこめることで、木としての第二の人生を与えることだと考えています。

「木」はただの素材ではなく、山で育った命。木工は、「木」に第二の人生を送ってもらおうこと。

木の文化、その芽を育てる — 2 — 廿日市市木材利用センター



廿日市市木材利用センター  
運営協議会会長  
みづら・たかはら  
三浦 孝治さん  
(54歳・吉和)

木工職人に憧れて、30歳で木工の世界に飛び込む。家具作りを勉強し、木工会社に勤務の後、独立し吉和に「木工房」を設立。主に中国山地でとれた材木を使い、素朴で機能美に重点を置いた家具や木工品を製作している。また、木材利用センターで木工教室を行い、指導にも力を入れている。

「回数を重ねる」と、木工の知識を増やしていきたい」と話すのは、ボランティア歴10年の大ベテランの大段さん。現在センターに登録されているボランティアは約20人。しかし、なかなか人数が揃わないとのこと。「温もり、音、香りなど、木の良さを伝えていきたいです。木工に興味のある人は、ぜひ参加してください。」



木工ボランティア  
おおだん・のりゆき  
大段 徳行さん  
(71歳・広島市)



廿日市市木材利用センター  
廿日市市木材港北5-95  
問合せ ☎2393

市内で唯一けん玉製造ができる設備を有し、けん玉体験教室やけん玉製造見学ツアーなど、けん玉復活に向けた活動を展開。また、市民が身近に木と触れ合える場所として、各種木工教室や、特産小木工品、さくらチップなどの展示販売などを行い、週末は多くの家族連れで賑わう。木材利用センター運営協議会が運営。教室を手伝ってくれるボランティアの方を常時募集している。

インタビュー —Interview—

廿日市けん玉クラブで活動する皆さんに聞きました



ひだか・すばる  
日高 昂くん  
(小学4年生・4段)

うまい人がまわりについて「すごい」と思ったのがきっかけで6歳から始めたという昂くん。現在4段で、今は二回転灯台に挑戦中。



ひだか・ちひろ  
日高 千優さん  
(小学1年生・初段)

お兄さんがやっていたので、自然にけん玉を始めていたという千優さん。現在初段。一回転飛行機に挑戦中。



にしもと・りさ  
西本 理紗さん  
(小学6年生・5段)

小学1年生から始めた西本さん。平成21年、小学3年生のとき、全国少年少女けん玉選手権大会で2位の成績を残す。写真はつるし一回転飛行機。「常に目標を高く掲げ、それに近づくように努力しています」と話してくれた。



けん玉教室

とき 毎月第1または第2日曜日  
ところ 廿日市市木材利用センター  
料金 1回300円  
問合せ 廿日市木材利用センター ☎2393

れるような特色ある学校教育に「してほしい」と、市内の小学校や保育園などでけん玉の楽しさを伝えていく。

「平日にこういう形でけん玉教室をしたかったからフリーになっただけです」と、退職した動機を語る。学校に勤めていては、平日日中の時間が取れないからだ。

また、地域の年配者が集まる「サロン」での教室も好評だったそう。けん玉は指先を使い、脳を刺激します。実は、高齢者にこそ、やってほしいと思っています。

「わたしにとってけん玉は人生そのもの。この年になってもけん玉に夢中です」と、砂原さん。「今後もけん玉を通じてまじの魅力を発信していきたいですね」と話してくれた。

世界中にけん玉の魅力を伝えるのも、砂原さんの大きな目標だ。今までにモンゴルやフィリピン、ハワイ、台湾などでも普及活動を行ってきた。

「わたしにとってけん玉は人生そのもの。この年になってもけん玉に夢中です」と、砂原さん。「今後もけん玉を通じてまじの魅力を発信していきたいですね」と話してくれた。



廿日市けん玉クラブで指導に当たる砂原宏幸さん（写真右）。振り上げた「けん」を「玉」の穴で受ける飛行機と呼ばれる技。小学1年生の穂尾太浩（まきお・たいこう）くん（写真左）は、「今までできなかった技ができるようになるとうれしいです」と話してくれた。



すなはら・ひろゆき  
砂原 宏幸さん  
(59歳・丸石)

木材利用センターでのけん玉教室や、市内各地域のけん玉クラブでの指導をはじめ、各種イベントでのパフォーマンスや体験教室など、けん玉の普及活動に取り組む。県内外だけでなく、モンゴルやフィリピンなど国外でも積極的に活動し、平成20・21年には市観光親善大使の大役も担った。けん玉道5段。日本けん玉協会西広島支部長も務める。

「廿日市市はけん玉の発祥地です。もっとけん玉の魅力を多くの人に知ってもらいたい」と、平成13年に第1回けん玉大会を企画するなど、その普及に尽力した。

その後、53歳で教諭を退職。「砂原夢企画」を立ち上げ、本格的な普及活動を開始。「けん玉を通して、世界からも注目さ

小学校教諭を53歳で退職し、けん玉の普及に人生を掛けた砂原宏幸さん。「できた」「やった！」を体験できるけん玉の楽しさを世界に広めたいと、活動を続けている。

# 「けん玉先生」と呼ばれる達人がいる

「やっぱり原点は、小学校のころ、夢中になって遊んでいたことです」。そう話すのは、砂原宏幸さん。平良小学校教諭時代に、「けん玉クラブ」の顧問となったことがきっかけで、昔夢中になったけん玉にのめり込んでいったとのこと。その後廿日市けん玉クラブや、大野けん玉クラブを立ち上げ、けん玉の普及活動に力を入れ始めた。当時、あちこちに講師として呼ばれていた砂原さん。しかし、廿日市にけん玉の大会がなかったことを残念に思っていたという。